

かごの内にて狂ひ出し、無體に籠のひごをかぞへ、口を開け、何れもわり餌にて三四日も飼候内、都而相落、勿論餌のかげんは色々手をかへ、虫の類種々、餌に生鱈等小海老等を飼候而も、一向ひとり餌迄は飼候事無之、熱氣の煩ひと思ひ、夜々泉水の中へ杭を立、それに籠を釣し留ても、又毎日日に三度計宛水をあびせ生立試候而も、皆々同じ煩にて巢より取揚、十日計にて巢數皆落候ゆへ、親鳥にて餌付飼より外はなきと思ひしに、然る所寛政九年午夏、江戸麹町の鳥やへ、駿河町田中屋善四郎と言者、川鳥の巣子生立候持越、至宜敷飼立、餌もホトにして常の鳥のごとく、籠にて飼置候ゆへ、度々右の善四郎の旅宿へ參、川鳥の飼立よふを習候得共不教、依而拙旅館に相招、得と相頼、教くれ候様申候處、右善四郎も度々巣子を相落し、飼留メ候事不叶、夫より工夫にて鱈に十分餌を堅く合せ略、丸め、夫にもくほうつきといふ虫を、丸めたる餌にぐるくつけて飼しと也、是にて無口能生立上ルとの事を教し也。

〔倭名類聚抄羽族名〕鴟 唐韻云、鴟他后反、漢語抄  
〔類聚名義抄鳥〕鴟他口、大口二反、水鳥  
〔土左日記〕廿一日、承平五年正月、うの時ばかりに船いだす。略、くろとりといふ鳥、いはのうへにあつまりをり、そのいはのもとに、浪亥ろくうちよす、かぢとりのいふやう、くろ鳥のもとに亥ろきなみをよすとぞいふ。

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長六年三日癸巳、申刻御所北對西端興臺所東間、海黒鳥。海鷗。云云、又興一、飛落、和泉前司行方郎從等獲之、即被放海邊、六日丙申、爲和泉前司奉行、昨鳥怪事於御所被行御占、晴茂朝臣已下病事火事之由勘申、此鳥貞應元年四月死寄前濱腰越等、同年八月、彗星出現云云、

〔黒鳥考〕天保十五年二月、我亡父○本居内の大平の教子なる伊豫國宇和郡野田村にすめる、二神重兵